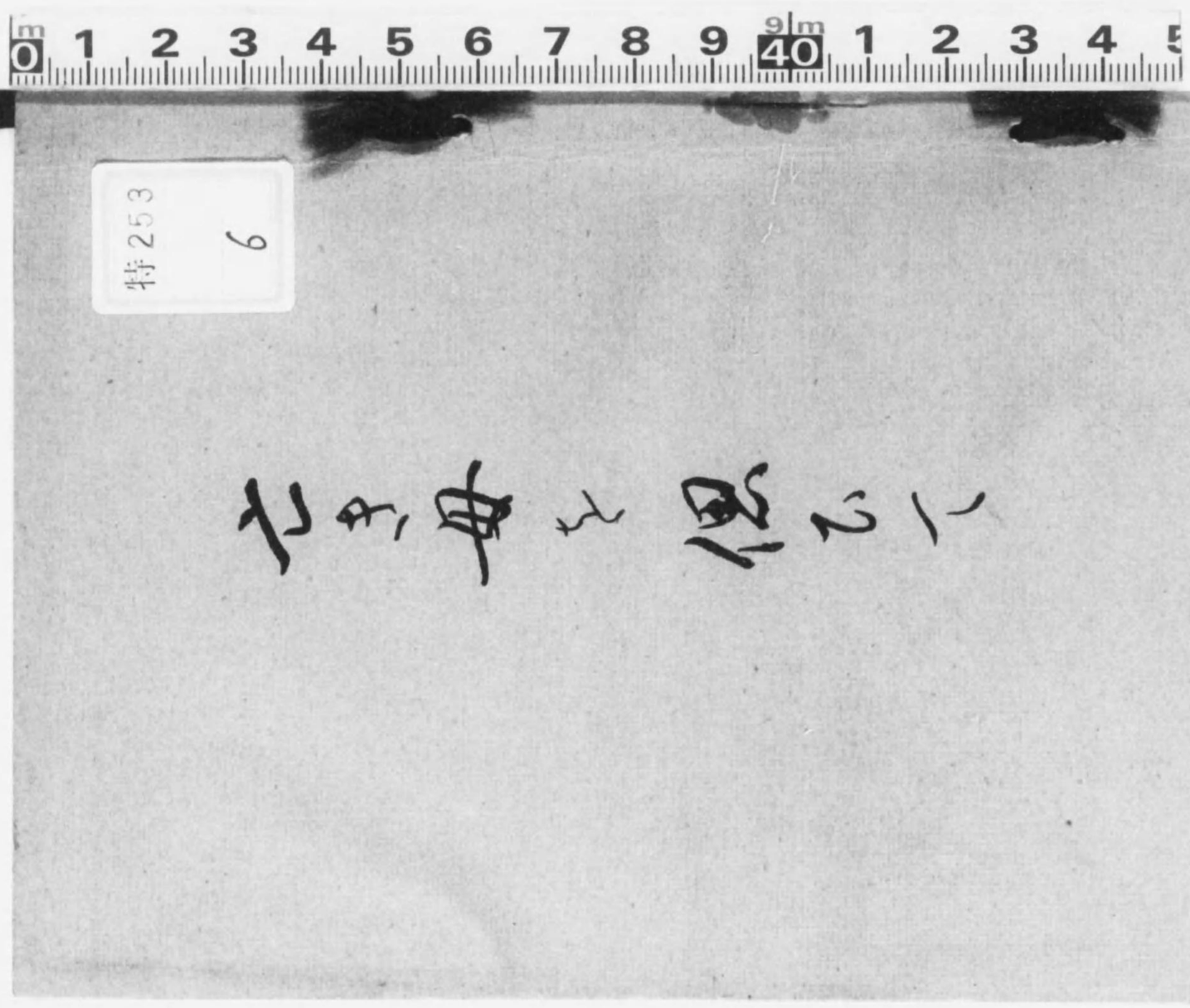


特253
6

特253
6

母の日しり在

はしがき

亡母ノブ子刀自の五十日祭は郷里に於て十日祭に引き寄せて營みました。其の後御魂を東京にお連れ申して、丁度五十日祭に當る日に東京に今迄御祭してありました祖先の御魂の方にお移しいたしました。此の機會に最近の母のことども二三書き綴りまして、母の動靜を偲ぶことにいたしましたのが、此の小冊子であります。

昭和十四年十一月

山本英輔

母に對する世間の御同情

母の生前には各方面から多大の御同情を賜はりまして、一日でも永生きをする様にとお骨折下さいましたが、九月中旬から腰が痛み出し床に就いて居りました處、遂に其の甲斐もなく同月二十八日といふに眠るが如く此の世を去りました。天命とは存じますが、斯くの如く天壽を全うして大往生を遂げました事は、一重に皆様の厚き御同情の御蔭と只管感激いたして居ります。

思へば昨春東屯野日本閣に於ける、藤野君山翁八十の祝賀會席上で、御紹介を受けました彫刻家川眞田祥雲氏は、繁田幸二氏著書の「日本女性典型女丈夫山本英輔大將ノ母」を讀まれ興奮のあまり、夜を徹し翌朝から母の爲に鑿を取り、全身熱と力の塊となつて一氣呵成に延命冠者の能面を彫刻せられまして、隣家の某宮家に奉仕されて居る方から福箕を讓り受けられて、箕面に能面を配し、更に藤野君山先生の許に馳せ

て其の由來記の揮毫を賴み、之を携へて夜遅く十時過ぎに母へと持參せられました。始め夜遅く何事かと訝しく思ひましたが、事の次第に全く感謝いたしまして、一刻も早く母に其の好意の贈り物を屆け樣と思案して居る折も折、前記の繁田君が見えましたので、その幸便に託し屆けてもらひました處、母も大變喜びまして早速表座敷に掲げて、朝な夕なに之を眺めてはその好意を感銘すると共に來客の方にも一々披露して御厚志に感謝して居つたとの事であります。

又青年畫家林東文君は（同君は東郷元帥の肖像畫を畫かれて元帥に其才を嘉せられ東の一字を戴かれて師匠文橋畫伯からもその文の一字を貰ひ之を合せて東文と號して居ります）母の肖像を描いて下されましたので、棚橋絢子女史にその讃をお願ひしました處、此の夏に至り和歌の讃が立派に出來てお書き入れ下さいましたので、大急ぎで表裝させて歸省の折に持ち歸り母に見せましたら大變喜んで呉れまして、私の歸京後も親しい方々がお訪ね下さると、この話をして軸物を持出して床の間に掛けてはお

川眞祥雲氏彫刻
延命冠者能面と福箕

藤野君山翁書
上記由來記

林東文書伯筆　母の肖像畫と故棚橋絢子女史の和歌讃

見せして居つたさうであります。高齢の棚橋絢子刀自も亦母と相前後して他界せられましたので、一層淋しい思ひ出の貴重な品となりました。

亡母の若き頃の艱難苦勞の話は屢々新聞や雜誌に掲載されたり、兩三年前には宇垣各晟氏の著書「山本英輔大將と輝く父と母」最近には、繁田幸二氏の「日本女性典型女丈夫山本英輔大將ノ母」が出版されましたり、奈良縣曾爾小學校の橋本校長の如きは、十餘年前から母の苦闘時代を唱歌や民謠に作りて特殊の教材として課せられて居られ、靜岡市傳馬町小學校の齋藤訓導も敎へ子達に屢々感想文や繪卷物等を書かせて訓育指導にあてられて居ましたりして世間各方面の人口に膾炙されると共に他方には時恰も日支事變に際會し、母と運命を共にさるゝ幾多忠勇なる戰死將兵の年若き未亡人達の一生の指針に供したいとて、いろ〳〵鄭重なるもてなしと厚き御同情を受けました事は、亡母が非常に感謝いたして居りました。

追　記

足利市の中村八左衞門氏は縣廳に於ける檢査に合格した手織布地の端を縫合せ、細君の里方で栽培せる棉花を以て座蒲團を造られて折角母に贈らんと準備の央ばに母が死去いたしましたので、其後之を紀念品として贈つて戴きました。御懇情に對しては地下の母も定めし感泣して居る事でありませう。

母のラヂオ放送

最近母に、ラヂオ放送の話があるたびに、私は母が高齢であるので留めて居りましたが、本年八月の始めに繁田君からの電報で、八月五日に母のラヂオ放送があるから、錄音をとつてくれとの依頼がありましたので、到頭母を引張り出したのか、餘計なことをして呉れる人があるものだと思つた位でした。併し母の事であるから假令話は拙くても、あの力強い聲で何か御役に立つ話をしてくれる事であらうと思つて、錄音の手筈をしたのでした。然るに當日は東京は大暴風雨で、愈々放送の時が來て耳を

人夫星赤のへ添介と母の前送放オヂラ

澄して聽いて居ると、豫期に反して、力强い筈の母の音聲が非常に弱々しく、どうした事かと失望した次第でありました。それから一ヶ月餘の後に他界した處を見るとやはり弱つて居たのでありませう。

然しこの爲に母の音聲も最新文明の利器によつて殘す事が出來たので、母も滿足した事でありませう。元來母は知識慾が旺盛で何でも合點が行くまで、根掘り葉掘り質問する方であり、又一方に何でもやつて見ると云ふ實行力を持つて居りましたので、この放送を冥土への土產話にしたのかもしれません。

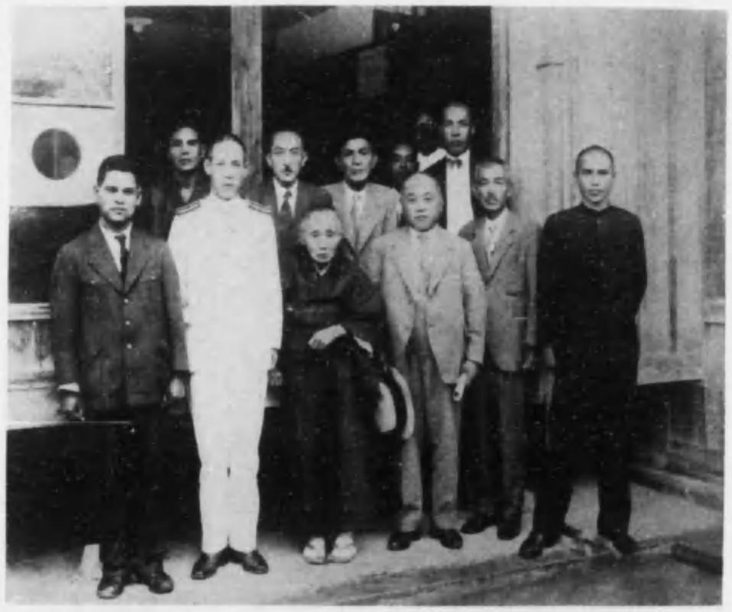
放送の講演は幸ひ、善行會の伊藤辰男君が未だ母の亡くならない前から、之を印刷し樣と非常に熱心に骨折つて居られましたが、最近立派に出來上りましたので之を御覽願うこととして、こゝには省略いたします。

母と最後の別れ

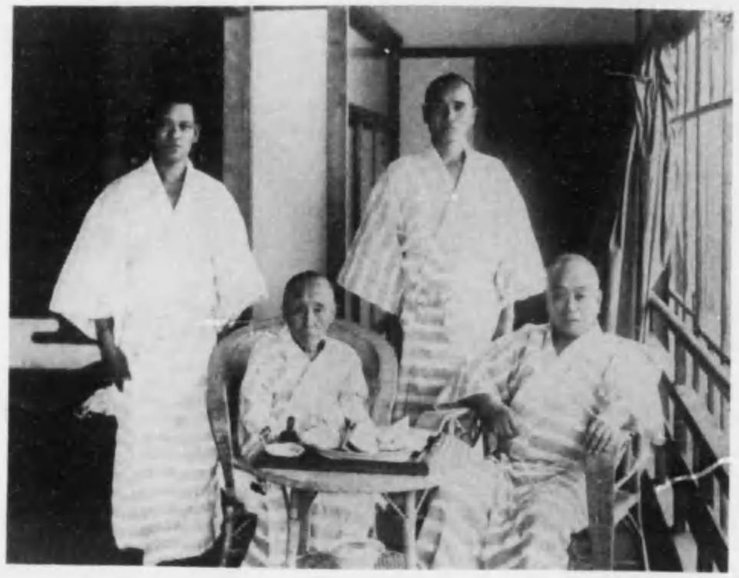
母は旅行には汽車でも汽船でも慣れて居るので、元氣の間はよく東京に出て參りました。昭和十一年の春長女が嫁ぐ時に上京しましたが、もう今度の上京が最後だぞと申しましたから、其後は東京から家族の者が代る〳〵歸つては、母を見舞うことにしました。昨年の春は妻が、秋には私と二女が、歳末には長男と二男が歸りました。今年の夏休みには子供等をつれまして私が歸省する積りでしたが間際になつて召使の者が不快で弱つて居るから大勢來られては困ると言う樣な事を親しく出入する者から云つて來ましたので、其他の親しく出入する人々に手紙や電報でその意見を求め大體豫定通り子供等を連れて歸らうと決心したところ最後に母から私一人丈け歸れと言つて參りましたので、私一人八月十一日東京を出發直行して十二日夕歸鹿しました。本年は昨年より元氣でした。召使の者も思つたよりは、良くて別に加勢の者も來て居つたの

で、この樣なことなら子供も連れて來ればよかつたと思つた位でしたが、近年私が歸省すると、友人や知人が親切に訪問して下され、母も御客の來らるゝ事を喜んで居りますが、私から見ると大勢の方が朝早くから押し掛けられると、人手の少ないところ、老人に迷惑をかける樣な氣がするので、本年は歸鹿早々翌日から先づ神宮參拜や御陵參拜や鑛山地方視察に兩三日を費しました。或日母に向ひ明日は南薩方面に旅行しますが一緒に御出でになりませんかとさそひました處、母の言うには私も加世田までは知つて知るが、南薩線が出來てから未だその南の枕崎には行つた事がないから、一緒に行かうと喜んで同意されましたので、八月十五日朝七時過ぎ家を出て、西驛から乘車しました。當時はお盆の十五日で非常に大勢の乘客でありました。伊集院までは二等車があるが、南薩線に乘換えると三等車計りになりましたが、幸に繁田早川兩君も一緒で色々と世話をして下さつたので、乘換後も安樂に腰掛けられました。枕崎には十一時過ぎ着きました。豫め警察に自動車を賴んであつたので、町長と警察署長が停

車場に出迎へられ其の案内で、港を一覽し、水産組合の事務所で少憩し、紀念の撮影をして指宿に向つたのでした。此時雨が少し降りはじめたが二時間計りで、指宿の摺が濱に到着し、偕樂園に落付いて入浴をして浴衣にサッパリした氣持になり、午餐後二三時間休息をし、此の間町から贈られた西瓜などを母も大變喜んで賞味し、私の揮毫して居る間を利用し、母は往年宿をかりた知人の家などを訪問して、夕刻指宿を出發日暮れて歸宅しました。約十二時間餘りの旅に別段の疲勞も見せなかつた位で、此の樣に元氣でありましたからまさかこんなにならうとは夢にも思ひませんでした。それに昨年の射撃大會では母の射撃が蔣介石に致命傷を與へて一等賞を獲得したので、日支事變の最後の幕まで見せてやり度いと願つて居りました。又それまでは勿論、存命することだと信じて居りましたが、此溫泉宿で寫した寫眞が今では永久に忘れ得ぬ思ひ出の紀念となりました。越えて十七日西郷隆秀君が友人を連れてやつて來て一緒に外出せんとする時、表の椽側で母と一緒に撮影してくれたましたが、此の寫眞も亦



枕崎水産組合事務所に於ける紀念撮影



指宿偕樂園に於ける紀念撮影

新照院自宅の縁側

最後の紀念寫眞となりました。八月一杯位は母の許に居る積りでありましたが　伏見宮大妃殿下の御葬儀を八月二十五日行はせられるので、豫定を繰り上げて二十二日出發歸京しました。母はその時停車場まで見送つてくれましたが、これが母の溫容を仰ぐの最後となり僅に一ヶ月餘りにして母は再び歸へらぬ旅路へと出發し幽明處を異にするやうになりました。

死前に思ひ當ることの數々

母逝いて早や五十日在りし日のことどもあれやこれやと思ひ浮べると、死を暗示する様な事の數々が思ひ當るのであります。母の新照院の家は丁度城山のトンネルを東から西へ拔けた出口の所にありまして、門口の處まで出れば、車窓よりよく見えて相呼應し得るので、鹿兒島への往復には此處で送迎するのが常でありましたが、去る八月私の最後の訪づれの歸りには、母は態々鹿兒島の驛まで見送つて呉れたのでした。

後で聞いた話ですが、その時女中が暑さも嚴しい頃とて案じたさうですが、母はもうこれが最後になるかも知れぬからと言つて、強いて送つたさうであります。圖らずも母の言葉が一ヶ月餘の後にその識となりました。

母は戰時經濟の一助にもと、かねて私の竹馬の友でよく母を訪ねてくれる友野長武君から今春アンゴラ兎を讓り受けて、飼養して居りましたが、九月になつて使を出して女中も最近體が惡くて弱つて居るし、手不足で兎の餌料のやり方も思う樣に行かぬから引き取つてくれと言つて來たので、受取りにやつて來た時、小屋に竹の皮が貯へてあることは前から知つて居つたけれど、今度は棕梠の皮が澤山貯へてあるから、此の話をした所、鐵が段々缺乏して針金もなくなるから、針金の代りに棕梠繩を造つて之を代用品とする積りで、先月皮を剝がして貰つたとのことでした。それから二時間餘り色々話をして別れたさうです。棕梠繩の準備から考へると、まだ二三年は生きる樣に自分でも思つて居つたのでせうが、兎の引き取り方を申出てた所から考へるとや

はり自然の豫感があつたのかもしれません。

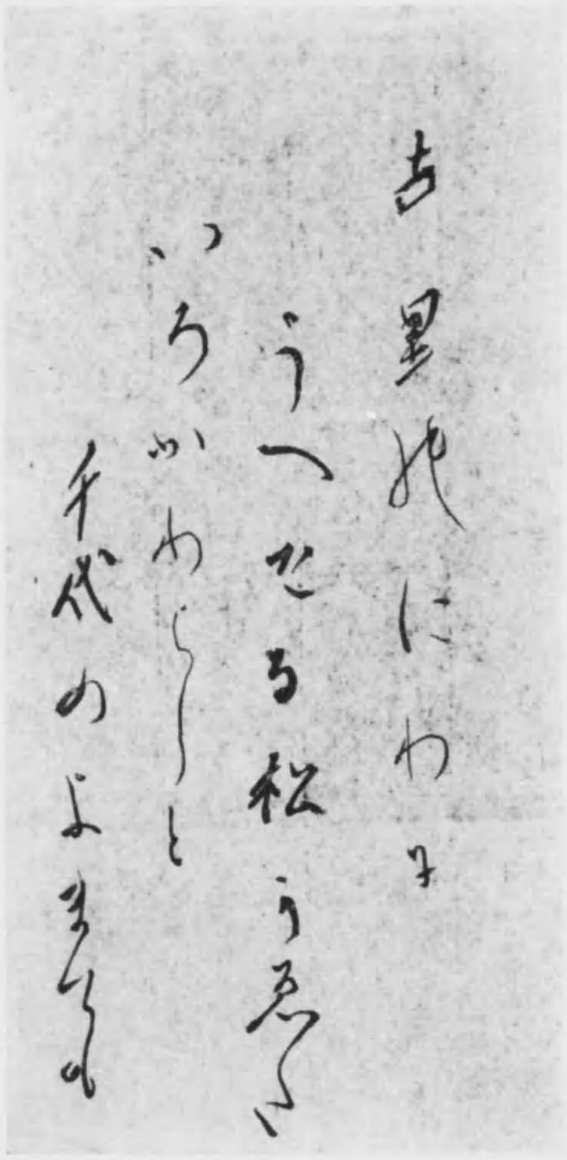
繁田幸二君が九月十二日頃訪ねた時は母は着物の繕ひ縫をして居つたさうですが、之が母の最後の糸針でしたでせう。繁田君が九月十二三日頃大島の處女會長を同伴して朝早く訪ねたときは、母は下の墓參に行く途中で手にバケツや、箒、鎌を携へて居つたとのことでした。

母は東京から色々の菓子を送つてくると殊に　宮樣方から賜はつた御菓子などはよく之を分けて上げたさうで、九月十九日訪ねられた時にも午後二時間半計り色々話をして歸へる時菓子を紙に包んでお渡ししたさうです。繁田君はいつも勿體ないと之を食べずに皆一つの紙箱に大切に保存して居り、包紙も又しまつて置かれるさうで、母の死後よく之を調べて見た所十九日に菓子を包んだ二枚に折つた包紙の中から「古里のにわにうゑたる松かゑたいろかわらしと千代のよまでも」と和歌を書いた紙が出て來たとて、わざ〳〵私の所に屆けて下された。之が恐らく母の辭世であつたでせ

う。九月二十二日繁田君は商用で小倉に赴き當分留守になるから暇乞ひに來られたところ女中は丁度醫者に行つて留守であつたが、色々山本家のこと私や孫達の事につき物語つたさうです。之が同君の最後の別になつた。繁田君は九月二十二日小倉に赴き親友の中村善次君の許に居つて、商用を果して居たが、急電に接して急遽歸麗した。其夜中村君の所に掲げてあつた母の寫眞が二本の紐で釣つてあつたのがプツツリ切れて落ちたさうです。

又昭和四年横須賀鎮守府司令長官時代自動車の運轉手であつた金子次郎君は官舍に一所に居つたので、一夏母が孫達と官舍に來て居つて知合の間柄であるが九月二十六日の夜母が官舍の茶の間に坐つて居る夢を見たと悔みに來たときの話でありました。

森のり子樣は母が蠶絲講習所時代の教へ子であり後生花の先生森彦四郎氏に嫁がれてからも母も好める道とて大變御懇意にして居つて五十年來の御友達であつた。今は已に未亡人で其の御主人の御墓が宅の直ぐ下にあり彼岸には必ず墓參に見えるだらう



から是非歸りに立ち寄つてくれと、花屋に傳言してあつたので、九月二十六日訪ねて來られた。母は臺所に接した坐敷の食臺の側にゴロリと横になつて居り起きようとすれど、ハット直ぐ立ちにくいと言つて女中に手傳つて貰つて起き上がりそれから立つて他の坐敷に行き自分で鰹節二本持つて來て、一本は蟲がついて居るから猫にやれ、一本はあなた御使ひ下さいと渡された。それから色々と世間話が始まり先月息子の歸つて來た時一緒に南薩方面に旅行したことや指宿の西瓜がおいしかつたことなどの話をしたさうであります。話をしたかつたが語る人もないので、あなたに來て貰つたと大變喜んで別れたさうで、之も親しき友達への最後のお別れになつて越えて二十八日には急に他界しました。

年來母に對して親切に世話して下さつた佐野新二氏が九月二十九日商用で上京するから何か東京に御傳言なきやと二十八日午前十時頃訪ねられた。今迄女中が東京へ御歸へりになる樣手紙を出しませうと言へば、つい先日歸つて來た計りだから、さう言つ

てやらんでも良いと申して居つたとのことでありますが、佐野氏に對しては見たまゝのことを話して下さい、さうすれば英輔もまた歸つて來るだらうと話したさうです。それから別に藥も飲んで居ないとのことであつたから大變良い漢方藥があるから勸めた所、母は女中への藥が良く效いた事を知つて居たので御願ひしますと注文したさうです。母は大正六年大病の時醫藥が殆んど何等の效果なく或特種の靈的療法で難治の病氣が癒つて以來餘り醫藥を望まなかつた。それで十一時過ぎ辭去し藥を調合して貰ひ午後一時過ぎ再び訪れた。母は直ぐ之を煎じる樣女中に命じたさうで、佐野氏は二時半頃辭去した。五時頃死去の電話が掛り外出先から急いで駈けつけた樣な次第で當日は三回訪れたとのことであつた。

以上の如く生前親しく御交際を願つて居つた方々には九月になつてから色々の機會で御目に掛り最後の御別れを告げた樣に思はれます。亡くなる前日には入浴もして綺麗に身を淨めたとのことでした。母は山本家の南林寺の墓地が改葬になる時草牟田の

新墓地によい所を求めて居つたところ、皆東京へ移つてしまはれたから、鹿兒島に葬るべき何物もないので返還を命ぜられ致し方なく、新照院の家の直ぐ下にある古い墓地に小さい所を求め、生前已に自分の墓を建てゝ居ました。私の娘が生後一ヶ月許りで亡くなつた時、東京に墓所がないので母の墓に納骨して貰つて置きました。最近繁田君が訪れた時、下の墓所に他人が這入りたがつて居る樣な氣がすると申したさうである。今日にして思へば母には何ものかしら冥感したのではないかと察せられます。

名殘の生花

九月二十八日午後八時前急電に接して私達夫妻は急ぎ出發準備を整へ午後十一時の汽車で出發し、後の子供達は翌日出發させました。私達は十三日朝着鹿しましたが、國許では大田の叔父が近所に居りますので萬事を主宰した市中の有力な方々が集つて葬儀の準備が着々と進められて居りました。棺前の飾りつけも一通り出來て居つたが、

次から次ぎ〳〵に花環其他の御供物が到來するので其置場を監督しながらふと棺後に廻つた所、床の間に立派な萬年青の生花が置いてあるのに氣が付いたので何時生けたか生き〳〵して居るので尋ねたところ、死去の前々日床から起き表の椽側に出でて、女中に庭に植ゑてある萬年青の葉を切らせて生けたものと判り、それでは最後の生花であるから萎まぬ内に早く寫眞をとつて置き度いと考へ床の間から椽側に持ち出した所混雜の際急なことで中々思う様に行かなかつたが、丁度岡積勇輔君が來合せて居つて商船乘組で在泊中の令弟早苗君を電話で呼び寄せ素人寫眞でうつさうとしたが背景が障子であつて破れたところもあり繼ぎはぎした所もあり見映えが良くないので、何か白い布でも張らさうとしたが、卒急の間に合はないので思案に餘り當惑中親類の平田の娘が、嘗て母の生花の弟子であつたので母が奥許しを得た時の慢幕と花臺があるからそれを使つたらどうかと言つて探して來たので、臨時にそれを張つて好個の背景とし、又花臺も之を使用しました。八月私が歸省した時には銅製花瓶に立華が生けて

名殘の萬年青の生花

亡き母が數十年住まゐし家の玄關側

あつた。九月に友野氏が訪れた時萬年青を生けて居つたと云ふことであるから、九月に入りてから二度も萬年青を生けた處を見ると何か感ずるところがあつたのでせう。この生花を見ると萬年青の葉は十本で心を加へて十一本となる。只一つ不思議なのは寫眞にも見える通り正面に挿込んだ葉が、外側に明瞭に見えて居るし、之がプツツリと切つてある。始めは折れたのだらうとの話であつたが餘りきれいに切つてあるので矢張り剪刀で切つたものと思ひ、何か辭世の意味が含まれて居るのではないかと思ひます。

臨　終

今鹿兒島縣の串木野に住つて居らるゝ長ヒサ子様は、母が若い時、蠶糸講習所時代からの同僚で、六十年近く親交して居る無二の生存者であります。令息直千賀君が鹿兒島市の銀行に勤めて居らるゝので、時折出應しては母を訪れ昔話をして二人で喜ん

で居られた。串木野に美味しい蒲鉾があるので、何時もそれを土産に持つて來られた。九月二十八日息子さんの所に所用があつて出應され銀行に行つて用を辨じそれから鴨池の宅に行つて午後串木野に歸るべく辭去せられた。その日の朝に限り蒲鉾賣りが來なかつたので、今日は手ぶらで何も御土産がないから、母の所へは行かずに又の機會にしやうかと考へて鴨池の家を出られたところが、どうしても足が停車場の方に進まず、到頭新照院へやつて來られた。丁度門の所で隣家の大田の叔母と一緒になり二人連れで來られた。女中は使に出て居つて只一人蚊が出るので蚊帳を釣つて寢て居たさうです。母は毎年九月十九日の霧島神宮の大祭には參拜するのが例でした。昨年は一番の汽車に間に合はず止むなく一番の乘合自動車で駈け付けた處、既にお祭の最中であつたさうで、今年は是非一番の汽車を外さぬ樣に長樣にも前日から鹿兒島に出て來らるゝ樣御約束してあつたところ、母は生憎腰が痛み出して床に就く樣になつたので、御神酒料を用意して長樣に御願ひする積りの所、長樣も國防婦人會の總會やら聯隊區

紙包の料酒神御たつあてし意用

山木ノブ
鹿兒島市新照院町一三番地

司令官の御話等あつて十八日夜も遅くなりとう〳〵出て來られなかつたから來年は必ず御一緒に致さう等と御宮詣りの話や最近の南薩方面の旅行の話に花を咲かせてつきるともなく喜び合つたとのことであります。その間長様が不圖母の手の異様に冷えて居るのに氣付かれて御自分の手の溫みで暖めながら話を續けられたけれど何となく氣に掛り出したのでそれとなく脈を取られたところ何だか細い様に感ぜられるので、ハッと思う刹那母が少し吐氣を催したので急ぎ金盥を用意する間もなく其儘息が絶えたので吃驚して大田の叔母が大聲を張り上げ叔父を呼び醫者に迎へを出したりしたが勿論丸野村田兩先生も間に合はなかつた様な次第で、恰も大木の朽ち折れるが如く、實に音もなく寂かに安樂に、然も親しき友と手を取り合つて喜び語りつゝ溘焉として大往生を遂げたのは、神の御惠であり母の徳であると思ひます。不肖な私共では容易に望み得ぬ事と云へませう。

死後の光榮

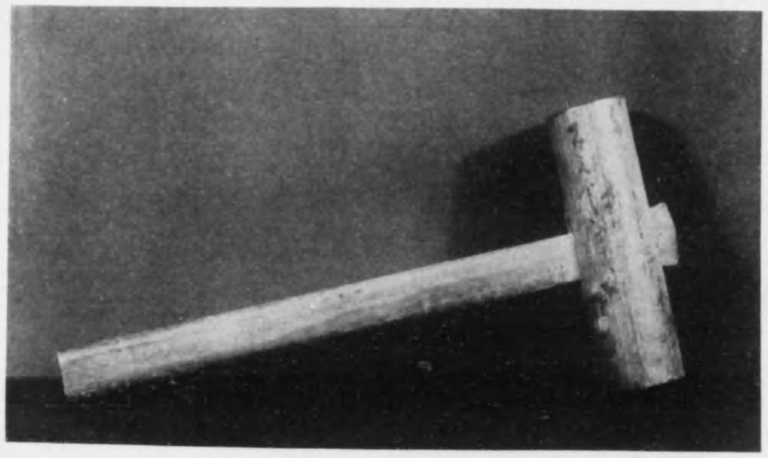
九月二十八日の夜は東京でも都合よく私は在宅でありました。前日の約束に從ひ夕食後濱畑君が來訪せられて、二三十分話して居ると「母急病直ぐ歸れ」との電報に接し私と妻は直ぐ歸國することとし、殘りの子供は翌日出發のことに決め、直ちに支度に取りかゝり十一時の汽車で取るものも取り敢えず出發しました。幸ひ來訪中の濱畑君には切符の事など色々御世話になり取敢えず電話で親戚に知らせした。極近親の方々には早速御悔みを頂きましたが何分にも急な事で大變失禮申し上げた。然しお蔭で兎に角、豫定通り出發したが車中で落付くと色〻取り殘したものが頭に浮び電報で子供等に持つて來る樣に命じたり、又親類や親しき方の所への通知の電報や國許への葬儀に關する打合せ等で汽車の中で多忙を極めた。私の考へでは、どうせ田舍婆さんのことでもあり、鄕里で亡くなつたのだから鄕里の二新聞にでも廣告を出して極く内輪に

簡單に葬儀をますせる心組であつたところ、三十日朝歸宅すると鹿兒島市各方面から男女の方々が何にくれとなく手傳ひ下さつて、萬事葬儀の準備が進められて居り、新聞にでも出たと見えて各地から、私共の歸着前弔電等が到着して居るので、吃驚した樣な次第でした。段々時を經るに從ひ之が增加して參り結局日本内地では樺太がない丈で北海道の北端から南は臺灣に及び朝鮮滿洲支那各地よりまでも弔電を頂き詢に恐縮した次第です。更に兩島津公をはじめ當路の高位高官の方々や民間有力の方々からも御供物まで頂き吾々遺族のものが夢想だもせざりし盛大な葬儀になりましたので、亡き母も生前この樣な有難い光榮に浴さうなどとは露程も思はなかつた事で、定めし地下に感泣して居ることゝ思うと皆々樣方の御厚誼に對して何と御禮申し上げてよいか言葉の言ひあらはし樣もない位であります。死して餘榮ありと申すことをあり〳〵と眼前に見て只感激に打たれるのみでありました。

反省自戒

母の眼から見ると我子はいくら年を取つても矢張り子供の様に感ずると思はれ先き頃のラヂオ放送によると、我子は六十四歳であるが外見は尙元氣である、然るに此の我が國開闢以來の大國難に際して何もせずにブラ〳〵して居るのが何となく腑甲斐ない様に感じたものと見えます。老齡魯鈍使ひ所がないから御役御免になつたので今更何とも致し方ありませぬ。

只陸軍では豫後備の將軍連が戰地に赴かれることなど思ひ浮べて何だか元氣な體を持つて居ながら何の御役もせずに勿體ないと考へて居ることが不圖言葉の上に發露したものと思ひ洵に不敏不孝謝するに言葉なき次第であります。母の死後、數十年住んで居つた家を一應片附けるとき色々古い昔のものも出て參りました。其の中に大工道具の中に一本の木槌がありました。明治參拾年十二月新調とありますから私が少尉に



槌　木　の　念　紀

任官した年の末で四十二年前のものです。それに一首の和歌が書いてあります。

たひ〳〵に曲る心を
打ちならし
みえよきなすも
槌の力そ

常に兎もすれば曲らんとする心を打ち直して正しく明るくした母の僞らざる氣持が偲ばれます。

母が此の世に生を享けて八十三ヶ年の長い生涯と己を全うして死せる撓まざる努力と崇高なる奉公の精神力の活動とを目の當り之を看て、親逝いて追うべからざるを思ひ到れば轉だ數行の泣と風木の悲とを禁ずることが出來ませぬ、嗚呼悲哉

玆にこの稿を終らんとするに臨み母の御靈の靜けく安らけくあらせられんことゝ共に、長へに我等の鏡となりて我等を照らし導き給ひ且篤く加護を垂れ給まはらんことを神の御前に祈りまつる次第であります。

昭和十四年十一月二十日印刷
昭和十四年十一月廿八日發行

（非賣品）

編輯兼發行者　東京市品川區北品川三丁目三二二
山本英輔

印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目一二
根本力三

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目一二
大日本印刷株式會社

397
24

終